

FD・SD
Faculty Development · Staff Development

2016

成城大学 Activity Report

はじめに：副学長・FD・SD小委員会委員長ご挨拶
新任教員研修会

FD・SD講演会・ワークショップ

「学生の主体的・協調的な学びをもたらす反転授業」

「主体的な学びとeポートフォリオ」

FD・SDワークショップ

「リサーチ・クエスチョンから考える教学IRの展開

—有効なデータ活用に向けて—

学生授業評価アンケート
各学部のFDへの取り組み
2017年度活動計画



学生を懸命にさせる教育をめざして



はじめに

副学長
教育イノベーション委員会FD・SD小委員会委員長

杉本 義行 教授

FD・SD活動の実質化に向けて

昨年度のFDにかかる事業は、おかげをもちまして無事に実施することができました。皆様のご協力とご理解に感謝申し上げます。実は、大学設置基準の改正により本年度よりSD(スタッフディベロップメント)が義務化されました。そこで、本学では教学等に関するSDとFDについて検討する組織を「教育イノベーション委員会FD・SD小委員会」とし、これに伴い本冊子も『FD・SD Activity Report』と名称の変更を致しました。

ところで、本学のFD活動が全学的に開始されてから来年度で10年目を迎えます。そこで、本年度のFD・SD小委員会では、FD活動の柱となっております『学生授業評価アンケート』についていくつかの見直しの検討を行っております。改正案が承認されましたら、来年度のアンケートから実施したいと考えております。

もうひとつはSDに関するご報告です。この4月よりピアチューター制度が発足いたしました。ピアチューターは学びのコミュニティの起点となるべく、学生の学習を支援するための学生サポーターです。チューターのみなさんは、サポート活動に必要なコーチング、ファシリテーションといった30時間に及ぶスキル研修に取り組んでいますが、そのすべてに図書館、教務部、教育イノベーションセンターの職員が参加しており、研修内容の検討やふり返りのミーティングを行っています。これは、ピアチューター育成というPBL(課題解決型学習)を通じた、まさにSD活動です。その具体的なお報告は、次年度の本レポートで行いたいと思います。

最後に、今後重点をおくべき活動について3点、述べさせていただきます。

第1に教育内容に関する高大接続です。この1年ほど、他校の中高の授業見学や先生方とお話をしたり、中高に関する講演会・セミナーなどに積極的に参加してまいりました。その結果、ま

だ一部であるとはいえ、ラディカルに改革を進めている中高では中学受験での英語入試の導入や大学入試改革をにらんだ「思考力入試」の導入や教育内容の見直しがかなりのスピードですめられていることがわかりました。ポイントとしては、大学入試改革の動向とは無関係に世界的な教育の動向を視野において改革を進める学校もでてきていること。さらに、中学受験の親世代で進学実績とともに教育内容をより重視する変化がでてきており、その動きを後押ししている傾向が見られることです。

中学、高校での授業方法や教育内容の変化について、生徒を受け入れる大学としてはアンテナを高くして注視する必要があると感じています。そのささやかな試みは、3月末に行われた教育イノベーションセンター開設1周年記念のシンポジウムでの学園高校もふくめた高校3校での探究型学習の事例報告でした。今年度に入り、京大をはじめ各大学の公開講演会やFDセミナーなどで高校の先進的な取り組みが紹介されているのはそうした流れの一環だと思います。本学でもこの方面での情報共有を続けていく必要があると考えます。

第2は、授業方法などの具体的なスキルアップに関する活動です。本年度刊行された『授業カタログ』は、こうした試みの一環です。今後、インストラクショナルデザインの知見など授業ですぐに役立つスキルについてのワークショップは引き続き重要であると考えます。

第3は、FDやSDに関連した情報のみなさまへのご提供です。授業手法の動画、授業方法に関する書籍、全国での研修のお知らせなど必要な情報が十分に提供されていないという反省がございます。これについては、HPの作成などで改善したいと考えています。今後とも、教職員のみなさまからのさまざまなご意見やご要望を賜れば幸いです。

新任教員研修会

2016年4月9日(土)に、新任の先生方に一日でも早く本学をご理解いただき、円滑な教育活動を始めていただくための一助として、新任教員研修会を開催いたしました。

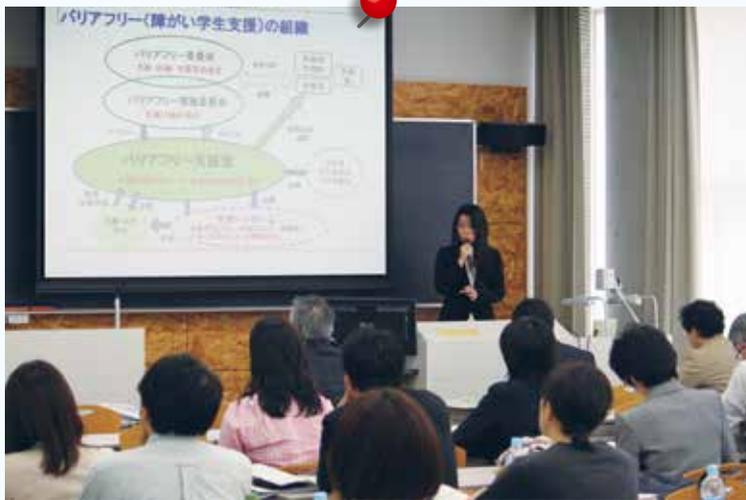
専任教員は13:00～16:45、非常勤講師は13:15～16:05の時間帯で行いました。

学長のお話、DVDは、成城大学のことを知る良い機会でした。他もそれぞれ勉強になる部分がありました。

参加者
Voiceを
ご紹介!



学長による成城学園100周年に向けての取り組み等の解説



バリアフリー委員会による学生支援の解説

参加状況は、専任教員は対象者4名全員(経済学部1名、法学部2名、社会イノベーション学部1名)、非常勤講師は対象者48名のうち25名が参加されました。

非常時の対応について

- 《もしもの時を想定した準備・確認》
- 成城大学・成城学園内の地図を把握しておく
 - 授業で使う教室の号数、階数、避難経路を確認しておく
 - 一斉教養授業の「緊急対応準備品」の確認
 - 研究室等の自身の生活空間における避難を確認しておく
- ※非常時の対応は、正しい知識と冷静な判断が重要です。また、緊急時には、必ず避難してください。



企画調整室による非常時の対応についての解説

非常時の対応について、とてもよく考えられていると思いました。

もう少し早い時期、せめて開講日より前に研修会を開いて欲しかったです。



研究機構事務室による科学研究費助成事業等の解説

新任教員研修会 スケジュール

専任教員・非常勤講師共通スケジュール

内容	担当
・研修説明	FD小委員会 委員長
・挨拶	学長
・成城大学の沿革 ・これからの取り組み（学園創立100周年に向けて第2世紀ビジョン） ・ミッション ビジョン ・自己点検・評価と認証評価等	学長
・授業に関することについて 学則、学年暦、休講・補講、欠席届、公欠、教室使用・教室変更、機材設置、聴講生・科目等履修生、他学部聴講等 ・Campus Square for Webについて 受講者名簿、成績入力等 ・試験、レポートについて 定期試験、追試、再試、試験施行内容登録等 ・成績について 成績評価・開示（評価分布含む）・問い合わせ制度等 ・シラバスについて 記載必須事項等 ・学生授業評価アンケートについて 実施要綱等	教務部
・特別な支援を必要とする学生について	バリアフリー 委員会
・非常時（火災・地震等）の対応について	企画調整室
・教育研究用ネットワークとその利用について ・情報関連設備、外国語教育設備、教材作成設備とその利用について ・e-learningツールとその利用について	MNC
・8号館各教室、設備視察	MNC
・図書館現地視察 図書館の概要・利用方法について ・他大学利用状況等	図書館



教務部による解説の様子



教育イノベーションセンターによる教員業績システムの解説



8号館現地視察の様子



専任教員にプラスした内容

内容	担当
・成城学園の建学の精神 ・教育理念等について（DVD）	教育研究所
・教員業績システムについて	教育イノベーション センター
・科学研究費助成事業について ・特別研究助成費について	研究機構事務室



非常勤講師にプラスした内容

内容	担当
・非常勤講師控室現地視察 非常勤講師控室の利用方法について等	非常勤講師控室

FD・SD講演会・ワークショップ

講演：学生の主体的・協調的な 学びをもたらす反転授業

ワークショップ：誰でもできる反転授業入門～講義動画収録から配信まで～

講師 埜 雅典先生 (山梨大学大学院 総合研究部工学域教授 / 教育国際化推進機構大学教育センター長)

日時 2016年7月29日(金) 午後5時～7時

学生の主体的・協調的な学びを促進するために有効とされているアクティブラーニング。本学では、授業手法に関する実態調査より、9割以上の授業が何らかのアクティブラーニング型授業を実施しているという結果が出ています。このアクティブラーニングの質を向上させ、学生の学びをさらに深める「反転授業」という学習法が近年注目を浴びています。

「反転授業」とは、授業と宿題の役割を「反転」させた授業形態のことを指し、宿題として自宅でデジタル教材を使って講義を学び、教室ではその知識を使って演習を行う授業形態になります。

この度のFD・SD講演会・ワークショップでは、山梨大学で実際に動画配信による反転授業を取り入れている埜先生に、その具体的な手法と学修成果についてご紹介いただき、講演後には、実際に動画編集ソフトを操作してもらうワークショップも行いました。

当日の参加者は26名(内訳は下表参照)となり、盛会のうちに終了しました。当日の講演内容については、大学ホームページで公開しておりますので、ぜひご覧ください。



FD・SD講演会・ワークショップ参加者内訳

所属		人数
学内	大学教員 (非常勤講師 1 名含む)	18 名
	職員	8 名
計		26 名



講演内容をWeb上で
公開しております。



FD・SD講演会・ワークショップ

主体的な学びとeポートフォリオ

日時 2017年3月10日(金) 午後1時～4時50分

第1部

基調講演:「いま、なぜ、eポートフォリオなのか?」 講師 森本 康彦先生(東京学芸大学 情報処理センター 准教授)

事例報告:「初等中等教育での成果からのヒント!」 講師 小川 美奈恵氏(株式会社FCEエデュケーション)

第2部 ワークショップ:「eポートフォリオ・コンテナワークショップ」

近年、大学教育では、主体的に学び、考え、行動する力の育成が求められていますが、これと合わせて、学習を促進し、学習成果を記録・評価するためのツールとしてeポートフォリオが注目されています。しかし、いざeポートフォリオを導入しようとなると、継続的にどのように活用すべきか分からない、導入したものの普及しない、などの声も多く聞かれるようです。

この度のFD・SD講演会・ワークショップでは、第一部として、基調講演と事例報告の後、パネルディスカッションで効果的なeポートフォリオの活用方法等について議論を行った後、第二部では、日本データパシフィック株式会社のご協力を得て、Webシステムを使って実際にeポートフォリオを操作してもらうワークショップを行いました。

当日の参加者は80名(内訳は下表参照)となり、学外の方にも多くご参加いただき、盛会のうちに終了しました。当日の講演内容については、大学ホームページで公開しておりますので、ぜひご覧ください。



FD・SD講演会・ワークショップ参加者内訳

所属		人数
学内	大学教員	7名
	中学校高等学校教諭	3名
	職員	13名
学外参加者		57名
計		80名



講演内容をWeb上で公開しております。



FD・SDワークショップ

リサーチ・クエスチョンから 考える教学 IR の展開

— 有効なデータ活用に向けて —

講師 鳥居 朋子先生 (立命館大学 大学評価室 副室長、教育開発推進機構 教授)

日時 2016年10月7日(金) 午後4時20分～7時

IR (Institutional Research) とは「機関の計画策定、政策形成、意思決定を支援するための情報を提供する目的で、高等教育機関の内部で行われるリサーチ」と定義されています。この度のワークショップは、IRとは何かを理解すること、意思決定を支えるIRのための適切なリサーチ・クエスチョンの設定、リサーチ・クエスチョンを解決するためのデータの収集・分析、結果を教育改善に結びつける手法を学び、実践に活かす機会とすることを目的に開催しました。

ワークショップでは、前半に立命館大学における取り組みの紹介をうかがった後、IRを実践するための具体的な手法を学ぶワークショップが行われ、鳥居先生から適切なアドバイスをいただきながら各グループでワークを進めて理解を深め合うことができました。

当日の参加者は30名(内訳は下表参照)となり、本学園中学校高等学校の先生方や学外の方にも参加いただき、盛会のうちに終了しました。当日の講演内容については、大学ホームページで公開しておりますので、ぜひご覧ください。



FD・SDワークショップ参加者内訳

所属		人数
学内	大学教員	9名
	中学校高等学校教諭	2名
	職員	14名
学外参加者		5名
計		30名



講演会資料をWeb上で公開しております。



学生授業評価アンケート



2016年度は、全学的な学生授業評価アンケートを大学、大学院の全科目を対象とし、前期、後期の2回実施いたしました。実施状況は、実施任意科目も含め、2,279科目中1,900科目(実施率83.4%)でした。

アンケートの集計結果は、Campus Squareで学内公開し、別途、科目別集計表を各科目担当者へ、大学全体集計表、科目開設部門別集計表、授業形態別集計表を学長、学部長、研究科長、共通教育研究センター長、国際センター長、キャリアセンター長へ報告いたしました。アンケート集計結果の概要および集計結果に対するコメントは大学ホームページに掲載しておりますのでご覧ください。

なお、この集計結果を授業改善に役立てたいと考えておりますので、今後とも本アンケートにつきまして、ご協力いただきたくお願いいたします。

2016年度 前期 授業評価アンケート集計結果 成城大学

対象	大学全体	実施対象科目数(A)+(B)	618	実施科目数(C)+(D)	563	延べ履修者数	21,600
		実施必須科目数(A)	356	実施科目数(C)	348	延べ回答者数	15,275
		実施任意科目数(B)	262	実施科目数(D)	215		

設問	項目	平均値	設問12との相関係数	回答数(人)/割合(%)					有効回答数	無答・無効数
				5	4	3	2	1		
1	この授業によく出席した 出席率 ⑤90%以上 ④80~80% ③70~70% ②60~50% ①40%以下	4.57	0.14	9,784	2,946	1,035	215	84	14,064	1,211
2	授業中意欲的に取り組んだ(ノートをとる等)	4.16	0.42	6,407	5,342	2,202	578	211	14,740	535
3	教員は授業時間を有効に利用した	4.38	0.62	8,376	4,363	1,431	361	197	14,728	547
4	休講または教員の遅刻が多かった ※2	4.38	0.18	605	808	1,188	1,033	10,183	14,717	558
5	教員の話し方は明瞭であった	4.26	0.64	7,793	4,165	1,837	599	318	14,712	563
6	この授業のレベルはあなたにとって適切であった	4.08	0.63	6,087	4,981	2,694	783	225	14,750	525
7	教員は教室内で学習にふさわしい状態に保たれるよう心掛けた	4.37	0	8,148	4,453	1,695	348	118	14,760	515
8	授業への教員の熱意を感じた	4.41	0	7,922	4,292	1,778	246	104	14,756	519
9	教員は発言・議論等授業参加を積極的に促した	3.98	0	6,087	4,453	1,695	348	118	14,760	515

2016年度 後期 授業評価アンケート集計結果

対象	大学全体	実施対象科目数(A)+(B)	1,489
		実施必須科目数(A)	909
		実施任意科目数(B)	580

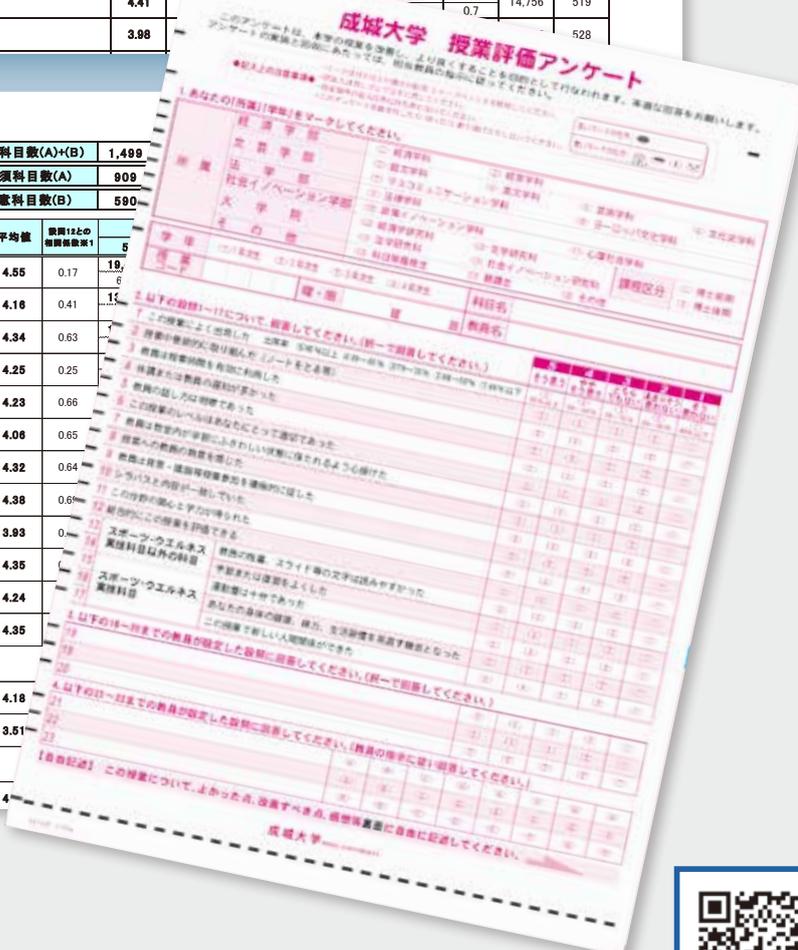
設問	項目	平均値	設問12との相関係数
1	この授業によく出席した 出席率 ⑤90%以上 ④80~80% ③70~70% ②60~50% ①40%以下	4.55	0.17
2	授業中意欲的に取り組んだ(ノートをとる等)	4.16	0.41
3	教員は授業時間を有効に利用した	4.34	0.63
4	休講または教員の遅刻が多かった ※2	4.25	0.25
5	教員の話し方は明瞭であった	4.23	0.66
6	この授業のレベルはあなたにとって適切であった	4.06	0.65
7	教員は教室内で学習にふさわしい状態に保たれるよう心掛けた	4.32	0.64
8	授業への教員の熱意を感じた	4.38	0.67
9	教員は発言・議論等授業参加を積極的に促した	3.93	0

スポーツ・ウエルネス実技以外の科目のみ回答

13	教員の板書、スライド等の文字は読みやすかった	4.18
14	予習または復習をよくした	3.51

スポーツ・ウエルネス実技の科目のみ回答

15	運動量は十分であった	4
----	------------	---

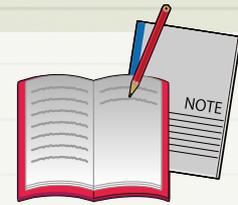


アンケート集計結果はWeb上で公開しております。▶



各学部のFDへの取り組み1

法学部の取り組み方



法学部
新山 一雄 教授

法 学部では、とくに「教育イノベーション」と銘うったような活動は存在していない。しかし、学部長、学科主任を中心に、法学部の研究・教育の質の向上に向けたさまざまな取り組みは、継続して行われている。それらのうち、最近の主なものいくつかを紹介しておこう。

ひとつは、5号館の地下の資料室のなかに新たに設置された「スタディールーム」の使い方を、教員・学生に徹底させる取り組みである。法学部資料室には、国内外の判例集、法律雑誌など、法律学研究・教育の命といえる資料が置かれている。この資料室は、以前は1階にあったのだが、スペースがあまりなかったのと、増え続ける判例集、雑誌等の荷重に耐えきれなくなっていたので、近年地下に移し、その時に「スタディールーム」というスペースが、新たに設けられた。それは、資料室を利用する教員・学生が、腰を据えて資料室内の資料を総合的に利用できるよという配慮によるものである。その手助けとして、新型プロジェクターなどの器材も置かれるようになったが、その操作方法について、学部長命令で、資料室職員にビデオを作成させているところである。このビデオは間もなく完成するが、これは資料室を利用する教員・学生がいつでも見られる状態におかれる。ビデオが視聴されかかる器材が有効に活用されれば、効率的に判例、法律論文の検索が行えるようになるであろう。教員の研究のみならず、法学部における学生の教育にとって重要なのは、問題のテーマに関連する判例、論文などをいかにして探しだすかということである。このスキルを学生に伝えるには、教員じしんがそれらの器材の操作方法を習得しておく必要がある。学部長がかかるビデオの作成を命じたのは、そういう意図によるものである。

もうひとつ、法学部のFD的活動と評価されるものは、学部長、学科主任を中心に常時活動している「カリキュラム検証委員会」である。以前から法学部では、カリキュラムを見直し、あるべき法学部教育とは何かを探る作業が行われてきたが、いまの学部長になってから、とくにそ

の作業が熱心になってきたように思われる。学部長の学科主任＝カリキュラム検証委員会に対する指示は、以下のとおりである。法律学の基礎・基本課目の充実とそれらを学生に習得させることを目指す、そして、現行のカリキュラムがそれらに適したものであるかを、つねに検証していくこと、である。そのために、実際に法学部でどのようなことが行われているかという、学部長、学科主任を中心に教務委員で構成された検証委員会が、現行のカリキュラムが、法学部のあるべき教育の方向に向かって有効で効率的なものであるのか、教員がそれに向けて適切な講義・演習をしているのかなどの検証を、頻繁に行い、その結果はかならず教授会で報告され、専任教員にフィードバックされ、個々の教員の反省・自己点検に資しており、わが法学部の教育の質の向上につながっているものと思われる。

上記のようなカリキュラム検証委員会の活動は、また、専任教員のあいだで自主的な講義・演習の点検・評価が行われるキッカケにもなっているようである。それは、検証委員会を構成する教務委員が、民法グループ、憲法グループ、刑法グループなどいくつかの法の領域から一人ずつ選出され、その教務委員が検証委員会と各グループの間の橋渡しになり、検証委員会で分析された問題点が各グループで話し合われ、グループ内で自主的に改善されるということも行われているようである。

以上、法学部で行われている研究・教育の質の向上に向けた取り組みを紹介したが、最後に、「教育イノベーション」について、法学部で欠けているところもいくつか指摘しておこう。ひとつは、法学部のなかで熱心に進められている講義・演習の点検・評価・改善も、いまのところ専任教員の範囲にとどまっているということである。他学部と同様に、法学部もかなりの講義を非常勤の教員に委ねており、それらについても常時研究・教育の質の向上に向けた取り組みが図られていく仕組みの構築が望まれる。

もうひとつは、全学的な教育イノベーションの取り組みである「FD・SD講演会」への法学部からの出席が低調であるということである。ほとんど毎回、学部長だけの出席という状態である。早急な改善が求められる。

全学共通教育科目におけるFD活動について

共通教育研究センター

阿部 勸一 教授

1 はじめに

共通教育研究センターが管轄している全学共通教育科目は、その種類が多岐にわたっているが、ここでは、WRD科目を中心にしたFD活動について紹介する。

WRDとは、「Write」「Read」「Debate」という3つの言葉の頭文字に由来する。大学の初年次において必要な力である「書く」「読む」「議論する」ことを経験し身につけることを中心とした科目である。現在は、文芸学部が、前期2単位、後期2単位の必修科目として開講しており、経済学部・法学部・社会イノベーション学部は、通年4単位の選択科目として開講している。

本センターでは、このWRD科目をどのように教えるのかという課題から、WRD科目のような初年次教育はどうあるべきかという議論を促し発信する活動としてFD活動を行ってきた。ここでは、それらを2つに分類して紹介したい。

2 直接的なFD活動:公開FDワークショップ「表現教育の可能性」

WRD科目は、担当教員の専門に依ることなく、

大学での学びの基本となる「書く」「読む」「議論する」こと、その根底にある「思考する」ことを学修する科目である。この科目のコンセプトを共有し、学修の目的を達成するための試みとして、2010年度より、FDワークショップ「表現教育の可能性」を開催している。このワークショップは、同様の目的で、行っていたFD活動「WRD研究会」を進化させたものである。

これまでの開催内容は、表1の通りである。FDワークショップに改めてからは、単にWRD科目の教授法をめぐるFD活動という位置づけのみならず、大学における初年次教育のあり方について広く世に問う活動に進化している。

なお、このFDワークショップの内容は、本センター発行の紀要『成城大学 共通教育論集』第4号(2012年3月発行)より紙上再録として掲載している(一部は本学のリポジトリに掲載されている)。また、本センター10周年記念事業の一環として、これまでのワークショップの内容をもとにした書籍の刊行も予定されている。

表1:これまでのFDワークショップ「表現教育の可能性」

回数	開催日	テーマ	講演者(肩書きは当時)
第1回	2010年12月4日	表現教育の可能性	石黒 圭 (一橋大学准教授)
第2回	2012年1月21日	表現教育の可能性 ～書籍編集現場から～	下平尾 直 (株式会社水声社チーフディレクター)
第3回	2013年3月11日	表現教育の可能性 ～プレゼンテーション教育を通して～	師玉 真理 (神奈川工科大学准教授)
第4回	2014年1月16日	問う力・書く力を鍛える表現教育 ～教養教育の本質をふまえた再構築の指針～	児玉 英明 (京都府立大学特任准教授)
第5回	2014年10月25日	表現教育の可能性 ～大学生のための文章表現「パーソナル・ライティング」をめぐる～	谷 美奈 (帝塚山大学准教授)
第6回	2016年1月23日	表現教育の可能性 ～日本語教育の現場から～	安部 達雄 (一橋大学非常勤講師)
第7回	2017年1月28日	表現教育の可能性 北米の大学における日本学の学問的系譜と課題 ～ダートマス大学での実践から考える～	ジェームス・ドーシー (ダートマス大学教授)



3 間接的なFD活動:WRDプレゼンテーションコンテスト

本センターでは、WRD科目における学修の成果を発表する機会として、2009年度より、WRDプレゼンテーションコンテストを開催してきた。このコンテストは、テーマとなる言葉を共通テーマとして設定し、そこから学生たちが、具体的なテーマや問いを考え、プレゼンテーションとしてまとめた成果を競うものである(表2参照)。コンテストは、毎年冬期休業前の12月第三ないしは第四土曜日に行われている。

表2: 過去のプレゼンテーションコンテストテーマ

回数	開催日	テーマ
第1回(2009年度)	2010年1月9日	裁く
第2回(2010年度)	2010年12月18日	たべる
第3回(2011年度)	2011年12月17日	きる
第4回(2012年度)	2012年12月22日	住む
第5回(2013年度)	2013年12月21日	越える(超える)
第6回(2014年度)	2014年12月20日	とける
第7回(2015年度)	2015年12月19日	笑う
第8回(2016年度)	2016年12月17日	遊ぶ

コンテスト自体は、学生による学修の成果を披露し競い合い、互いに切磋琢磨する場でもあるが、同時に、担当教員間でも、授業の運営や教授方法などを学び合う場となっている。コンテストという共通の目標があるのはもちろん、プレゼンテーションのテーマも共通であるため、担当教員たちは、互いに授業の運営方法や教授法について、自然と自主的に情報交換をするようになる。これは、コンテストの前はもちろん、コンテスト本番での学生のプレゼンテーションを見たうえで、コンテスト終了後に自主的に(自腹で)行われる懇談会でも行われ、FD活動は、まさに「場外戦」へと突入し、熱い活動と化していく。ここでの情報交換によって、担当教員は、授業の教授法などをアップデートしていくのである。

このように、直接的なFD活動だけではなく、授業に関連する事業を通して、教員同士が、自主的か

つ自然にFD活動するのを促進すること、FD活動の「場」を提示することも、本センターにおけるFD活動だと言えよう。

4 FD活動のあり方について

本センターのFD活動は、「FD活動でござい!」と大見得を切るような「お仕着せ」のFD活動ではなく、例えば同じ科目を担当している教員同士が、自発的かつ自然に対話をしながら進めていくことが特徴であるといえる。特に、WRD科目に代表されるような初年次教育科目は、システムティックなコースワークが存在するようであり、存在しない難しい科目であり、だからこそ、自然に「草の根」FD活動となる。

ところで、教育イノベーション委員会FD・SD小委員会の前々身であるFD委員会が発足する以前に開催された本センター主催による本学初のFD講演会(2008年12月11日開催)において、講師である戸田山和久先生(名古屋大学教授)が、「草の根FDの場を作っていくことが大事である」という旨のことを話されていた(詳細は、『成城大学 共通教育論集』第1号参照)。しかし、近年(いや相変わらず?)、FD活動は、この話とは逆に、授業力アップのための教授法研修のようなものであると、FD活動を仕掛ける側も受ける側も考えていることが少なくないと思われる。だが、戸田山先生の話にあるように、例えば、普段から雑談のように自然な形で授業について話すことも、十分FD活動となるだろう。いや、研修のような「お仕着せ」の「非日常的」なFD活動よりも、「日常」の中にある「草の根」FD活動のほうが、ずっと地に足の付いた実のあるFD活動である。本センターのFD活動は、そのような「草の根」の形で行われてきており、成果をあげてきたといってよいだろう。これからも、「草の根FD活動」を続けられるような仕掛けを、本センターとして継続、発展させていきたいと考えている。

成城学園創立100周年・教育イノベーションセンター開設1周年記念

シンポジウム「高大接続と探究型学習 ～その評価と育成される資質・能力～」

成城大学教育イノベーションセンターの開設1周年を記念し、2017年3月25日(土)にシンポジウムを開催しました。当日は、小・中・高・大の教育関係者を中心に、北海道から鹿児島まで全国から約220名ものご参加をいただきました。

<基調講演> 「アクティブラーニングの評価を拓く」

- 松下佳代氏(京都大学高等教育研究開発推進センター教授)
- 「学習環境デザインにおけるイノベーションとリーダーシップ」
- 美馬のゆり氏(公立はこだて未来大学システム情報科学部教授)

<事例報告> 「未来創造型教育 ～福島から変革者を育てる～」

- 丹野純一氏(福島県立ふたば未来学園高等学校校長)
- 「未来をつくる学びのコーディネート ～チームとしての取り組み～」
- 金井達亮氏(かえつ有明中・高等学校教諭)
- 「マルチメディア劇創作における生徒の動機付けを高める仕掛け」
- 河合絢也氏(成城学園中学校高等学校教諭)



パネルディスカッションの様子

「授業カタログ」

本年度のFD活動における、授業改善を図るための制度的な取り組みの一環として、「学生授業評価アンケート」などにおいて高い評価を得ている先生方へのヒアリングをもとに、効果的な授業方法の共有を図ることを目的に、「授業カタログ」を刊行しました。効果的な講義や履修指導に役立つ授業実践の事例を収集し、授業改善の工夫を冊子として「見える化」することで、教員の皆様の授業改善や効果的な履修指導へつなげれば幸いに存じます。

2017年度作成の際も、先生方におかれましては、授業の取材・撮影のご協力をお願いいたします。



2017年度活動計画

- | | |
|--|---|
| <ul style="list-style-type: none"> 2017年 4月 ● 新任教員研修会 2017年 6月 ● 2016年度学生授業評価アンケート集計結果報告、公開 2017年 7月 ● 前期学生授業評価アンケートの実施 2017年 9月 ● 初年次教育学会第10回全国大会参加 ● 成城大学FD・SD Activity Report 2016年度版発行 2017年10月 ● 前期学生授業評価アンケート集計結果報告、公開 | <ul style="list-style-type: none"> 2017年12月 ● 後期学生授業評価アンケートの実施 2018年 3月 ● 2018年度事業計画、予算概算要求書確定 ※1 時期が未定の事業 <ul style="list-style-type: none"> ・FD・SDにかかる研修会参加、他大視察 ・FD・SD講演会・ワークショップ ・授業カタログ発行 ※2 事情により、上記の予定が変更になる場合があります。 |
|--|---|

成城大学教育イノベーション委員会FD・SD小委員会委員 (2017.5.1現在)

- | | | |
|--|-------------------|--------------------|
| 委員長 杉本義行(教育イノベーション委員会委員長/副学長/教育イノベーションセンター長/全学共通教育運営協議会議長) | | |
| 委員 林田伸一(教務部長) | 上田晋一(経済学部) | 佐藤光重(文芸学部) |
| 新山一雄(法学部) | 加藤敦宣(社会イノベーション学部) | 塘誠(経済学研究科) |
| 富山典彦(文学研究科) | 川淳一(法学研究科) | 南山浩二(社会イノベーション研究科) |
| 大友浩一(事務局長) | | |

発行日 2017年9月

成城大学教育イノベーション委員会 FD 小委員会委員 (2016.5.1 現在)

委員長 杉本義行(教育イノベーション委員会委員長/副学長/教育イノベーションセンター長/全学共通教育運営協議会議長)

委員 林田伸一(教務部長) 上田晋一(経済学部/経済学研究科) 木下誠(文芸学部) 新山一雄(法学部) 平井康大(社会イノベーション学部)

宮崎修多(文学研究科) 川淳一(法学研究科) 伊地知寛博(社会イノベーション研究科) 中村睦久(事務局長)